

lular responses of pigment cells to various is without equal in quality and originality in this field.

I conclude by asking you to honor the memory of our great predecessors by continuing to add to the strength of international

comparative endocrinology with your original and exciting investigations.

Good luck to you all--dozo gambatte kudasai. And a happy 30th birthday--tanjobi omedeto gozaemasu--to the Japan Society

日本比較内分泌学会からアジア・オセアニア比較内分泌学会へ

第2代会長 石 居 進

この3月末に奈良で大石正先生のお世話で開催されたアジア・オセアニア比較内分泌学会の大会のさいに、日本比較内分泌学会創立30周年を記念して元会長の一人として何か書くようにと内山先生からご依頼を受けた。するとすぐに小林英司先生から、先生の文の中に私の書いた学会創設に関する文を使いたいとお話を戴いた。もちろん喜んで使っていただくことにしたが、小林先生から同時にアジア・オセアニア比較内分泌学会の創立の経緯についても書いたらどうかとの示唆をいただいた。私も忘れないうちに書きのこしておくのも義務かもしれないと思い、筆をとることにした。

1985年に国際比較内分泌学シンポジウムがコロラド州のカッパーマウンテンで開催された。オーガナイザーはラルフ先生だった。標高の高いところで頭痛に悩まされた人もいたようだった。そのときに私はインドの Samir Bhattacharya、香港の Daniel Chan、台湾の John Yu、シンガポールの Tom Lam 氏ら、アジア各地の働き盛りの研究者たちの突然の訪問を受けた。もちろん、彼らは良く知っている人たちで、1970年代から80年代前半にアメリカやヨーロッパの大学や学会で何度か顔を合わせたことのある人たちだった。

彼らはいっせいに口を揃えて、論文をアメリカやヨーロッパの雑誌に投稿する際に

アジアの研究者は不当に差別されると訴えるのである。同じレベルの研究論文が、アメリカやヨーロッパの研究者によるものなら掲載されるが、アジアの研究者のものはレフェリー、あるいはエディターによって不当に低く評価され、掲載を拒否されると主張するのであった。その不満は私には良く分かっていた。私は当時、General and Comparative EndocrinologyのEditorial Boardに名を連ねていたので、すでにそのようなことはほとんどなくなっていたが、まだ駆け出しの時代には何度もそのように感じて悔しい思いをしたものだった。こういった差別に対抗するには我々はしっかりしたアジアの学会を作って、力を持つべきだというのが彼らの主張だった。そうすれば、こういう不当な差別をなくせるのではないかというのである。そこで日本の学会の会長である私にアジアの学会の創設に力を貸して欲しいというのが彼らがやってきた理由だった。

私は一瞬いまさら面倒くさいなと感じたが、すぐに反省して、初心に帰ってこれは協力して差し上げるべきだと決心した。学会を作ることが刺激となり、彼らの研究が活性化され、レベルが上がれば、差別もさなくなるに違いないと考えたのである。20年近く前のアジアの経済状況はどの国もかなり厳しくて、研究設備は最低であり、研究費などはないに等しく、学会に出たり、国外の雑

誌の論文の別刷りを購入したりするのに必要な外貨さえ手に入らないというような状況だった。そういう状況の下でも彼らは欧米で勉強し、母国に帰り、厳しい状況下でも必死に頑張って研究を続け、国際学会にも出てきていたのだった。また、インドと日本は研究者の数も多いので国の学会が作れたが、アジアの他の国々には国の学会を作れるほどの数の研究者がいないので、地域の学会を必要とするということもあった。そこで早速、準備委員会が形成され最初の会合がカップーマウンテンで開かれた。そのさい、私はまずアジアだけでなく、オセアニア諸国を加えるべきであると提案しすぐに了承されたが、これが後に厄介な問題を生むとは思ひもしなかった。そのあと、2年かけて精力的に準備が進行していったが、オーストラリアのある有力な比較内分泌学者がオーストラリアを中心とした別の南半球研究グループの形成を提案し、それにニュージーランドとアフリカの国々を加えて、我々のアジア・オセアニア学会から分離し対抗しようと動き出した。しかし、結局はこの動きは誰からも支持を得られずに消失してしまった。後日談になるが、この反旗を翻した方も結局は我々の学会に加入し、ジョン・ジョス先生が主催されたシドニーでの会には、(気持ちよく?)参加して下さって座長を勤めたり、開催国の人として挨拶もして下さった。

かくして2年後の1987年、名古屋において第1回アジア・オセアニア比較内分泌学会議が開催されることとなった。大西英爾先生が議長を勤めて下さって盛会であった。そのご、国際比較内分泌学会連合が形成された際に、日本比較内分泌学会と同じようにアジア・オセアニア比較内分泌学会も構成学会の

一つとなって国際的に大きな影響力を持つ学会となった。

私は一昨年の春に大学を離れ、研究からも離れることとなってしまった。出ないつもりでいた奈良でのアジア・オセアニア比較内分泌学会には大石正先生の心からのお誘いと、今は各国のトップクラスの地位について活躍しておいで、学会創設当時の発起人の方々からの強いお誘いとで、顔を出させていただいた。インドからはたくさんの研究者が参加され、中国や韓国、それにタイからも若い人たちが大勢おいでになっていた。いまはこれらの国々でも優れた研究が盛んになされていて、創設当時彼らが訴えた学会を必要とする理由など考える必要がなくなってしまった。アジア・オセアニアの現在の中心的研究者の多くの方々は、アメリカから母国に帰る途中で日本に立ち寄り、私に会いに研究室に来てくださった。そのさい、彼らは一様に、日本の研究環境のよさをうらやみ、母国の研究環境の悪さを嘆き、将来の心配をしていた。そこで私は過去の日本の状況とその推移を説明し、彼らを励ましたのだった。奈良の学会で彼らは一様に、まさかこうまで自国が発展するとは思わなかったと感慨深く語ってくれた。励ました私も、実のところ、こうまでどの国も発展するとは思っていなかった。まさに同慶の至りである。

翻って、これからの日本比較内分泌学会はどうあるべきなのだろうか。今はアジア・オセアニアの他の国の人たちともしっかりと話し合っ決めていくことが必要なのではないだろうか。しかし、これは私が考えることではない、若い学会員の方々が現在、そして将来をみつめて、しっかりと考えて、実行していくべきことなのであろう。